

こしがや能 春の調べ

令和六年四月二十九日(月・祝)
於こしがや能楽堂 開場・午後二時三十分
開演・午後二時

おはなし 関根 祥九

〔仕舞〕

嵐山 近藤 豊
吉野天人 依田 明子
笠之段 関根 祥九

〔舞囃子〕

善知鳥 関根 知孝

〔狂言〕

吹取^{シテ}野村 太一郎

清経^{ワキ}村瀬 提

後見 関根 祥九
高梨 良一

| | | | |
|----------|----------|----------|----------|
| 大鼓 柿原 弘和 | 小鼓 清水 和音 | 大鼓 津田 和音 | 小鼓 坂井 音隆 |
| 地謡 佐藤 明子 | 地謡 近藤 明子 | 地謡 依田 明子 | 地謡 藤波 重彦 |
| 地謡 金子 聡哉 | 地謡 金子 聡哉 | 地謡 金子 聡哉 | 地謡 金子 聡哉 |

終了予定 午後四時三十分頃

演目紹介

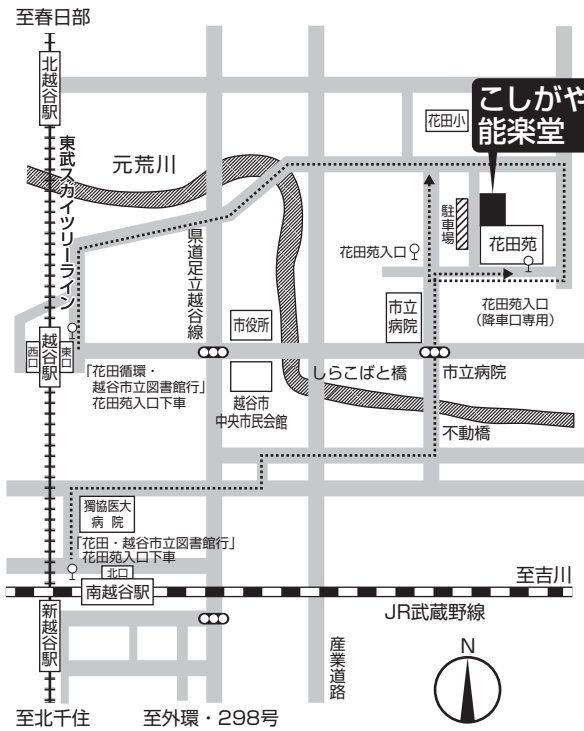
狂言「吹取(ふきとり)」

未だ定まる妻を持たない男は、願掛けに清水の観世音を訪ねて一夜を過ごします。すると『八月十五夜に五条の橋へ出掛け、月と共に笛を吹け。その音に惹かれて女性が一人現れるであろう。』と夢のお告げを授かります。ところが男は笛を持たず吹く事も出来ず。そこで知り合いの笛の名手に代理を頼むと...。妻をいを求める類曲には、「狂言」因幡堂や「釣針」などがありますが、本曲は笛の音に頼るといふ工夫が見られます。また以前は囃子(笛方)の演奏に合わせて演じてまいりましたが、現在は狂言方自身が笛を嗜む演出を用いる事も多くなりつつ、演技とともに演奏も見どころ聴きどころです。

能「清経(きよつね)」

平家一門が都落ちした後、都でひっそり暮らしていた平清経の妻のもとへ、九州から、家臣の淡津三郎(あわづのさぶろう)が訪ねて来ます。三郎は、清経が、豊前国柳が浦(北九州市門司区)の海岸、山口県彦島の対岸)の沖合で入水したという悲報をもつて来たのです。形見の品に、清経の遺髪を手渡された妻は、再会の約束を果たさなかつた夫を恨み、悲嘆にくれます。そして、悲しみが増すからと、遺髪を宇佐八幡宮(現大分県北部の宇佐市)に返納してしまいます。しかし、夫への想いは募り、せめて夢で会えたらと願う妻の夢枕に、清経の霊が鎧姿で現れました。もはや今生では逢うことができないふたり。再会を喜ぶものの、妻は再会の約束を果たさなかつた夫を責め、夫は遺髪を返納してしまつた妻の薄情を恨み、互いを恨み、互いの続く現世よりは極楽往生を願おうと入水したことを示し、さらに死後の修羅道の惨状を現します。そして最後に、念仏によって救われるのです。

「こしがや能楽堂」案内図



●チケットをお持ちの方は、公演当日、日本庭園「花田苑」(9:00~18:00)に無料で入園できます。●駐車場には限りがありますので、ご来場の際はなるべく公共交通機関をご利用ください。●会場内は、飲食ができません。●能楽堂の「能舞台」および「観覧席の一部」は屋外の施設となりますので、防寒及び暑さ対策にご留意ください。

アクセス
●東武スカイツリーライン越谷駅東口北側ロータリーより花田循環又は市立図書館行きバス「花田苑入口」より下車徒歩3分
●東武スカイツリーライン新越谷駅/JR武蔵野線南越谷駅北口ロータリーより花田行き又は市立図書館行きバス「花田苑入口」より下車徒歩3分